

序章 市長になる日

その日の朝は、五時に目覚めた。彼は、七時にセットしてあったアラームを解除し、静かにベッドルームを出た。

昨夜、ベッドに入ったのは十二時頃だった。就寝前に飲んだ睡眠導入剤が効いたのだろう。あまり寝不足は感じない。でも、気持ちはざわざわしていた。落ち着かなかった。こんなに早く起きてしまった。さて何をしようか……。

とりあえず、普段着のセーターとズボンに着替えてから、一階の郵便受けまで新聞を取りに下りる。彼の部屋はマンションの十五階だ。

エレベーターの中で、昨夜考えた挨拶の言葉をもう一度、頭の中で整理する。あらためて緊張に体が引き締まった。ハーツと深呼吸をしてみる。

夫につられて起きてきた妻が、キッチンで朝食の支度を始めていた。ベーコンが焼ける香ばしい匂いと、パンの焼ける音。トースト、ベーコンエッグ、サラダ、林檎がテーブルに並ぶ頃、彼は食卓に着いた。

「今朝は、ココアにしたら？ 血糖値が上がって頭が冴えるから」

「うん……」

いつもはコーヒーなのだが、緊張をほぐそうとしてくれる妻の気遣いがうれしかった。

(でもこの時、ココアを飲んだかどうか、彼も妻も全く覚えていない)。

その日の衣装はもう決まっていた。先月誂えた紺の縦縞のスーツと、今日の祝いに妻が選んでくれたネクタイ。その上品なピンクが、濃紺のスーツと白いものが増した髪にもよく映るだろう。

前夜は、大阪市内のレストランで妻と事務所のスタッフが、ビールとステーキで前祝いをしてくれた。

「三十六万七千五十八人の投票をもらったんですから、晴れやかな笑顔で入ってください」

事務所所長のはなむけの言葉はうれしかったが、前日まで続いた事前レクチャーで、想像以上に暗く厳しい問題ばかりを突きつけられ、素直に喜べる心境ではなかった。しかも、一緒に戦ってくれた気の許せる仲間たちと離れ、単身で新しい戦場へ乗り込まなければならぬのである。覚悟していたとはいえ、言い知れない不安が波になって押し寄せてくる。

身支度を整え、約束の時間が近づいた頃、チャイムが鳴った。今日から彼の秘書になる男が迎えに来たのである。

妻が見送ろうと玄関まで行くと、姿見の前で、彼はこうつぶやいていた。

「今日から市長なんだ……今日から市長なんだ……今日から市長なんだ……」

それから自分の頬つぺたをパンパンと叩いた。

「じゃ、行ってくる」

「頑張つて、行ってらっしゃい」

妻が、彼の背中をポンと押し出した。

午前八時半。マンション玄関に着けられた運転手付きの公用車プリウスに乗り込むと、

記念すべき彼の一日目はスタートした。

*

*

*

大阪市が発足したのは、一八八九（明治二十二）年である。当時、大阪は東京や京都と同様、特例で府知事が市長を掛け持ちし、市役所も設置されていなかった。市会があったが、府知事が出席して市長の代わりを務めた。市制特例が廃止され、大阪市役所が設置されたのは、一八九八年のことだ。同時に市会議員による投票で市長も選出され、初代大阪市長には、南区の商人、田村太兵衛が就任した。

市長選挙が公選制になったのは、第二次世界大戦後。一九四七年四月からだ。第一回統一地方選挙で大阪市民に選ばれた最初の市長は、近藤博夫。日本社会党公認で出馬し、保守系候補を破って当選した。任期は以前の六年から四年となる。近藤は京都帝国大学工学部を卒業後、大阪市役所で港湾部長、理事を務め、大林組常務、土木学会関西支部長などを歴任した人物で、在任中は広く市民の声を聴くため、公聴課を設置、そこで集積した市民の声が大阪市の戦災復興計画策定に役立ったという。近藤が一期務めた後は、内務省出身の会社社長、中井光次が三期務めた。その後は、一九六三年から二〇〇七年までの中馬馨、大島靖、西尾正也、磯村隆文、関淳一と五代連続で前の助役が市長になるという時代が延々続いてきた。

そして、二〇〇七年十二月十九日。異例の四十四年という長きにわたって続いた¹助役出身市長に終止符を打ち、戦後初めて民間出身の市長が誕生した。

第十八代大阪市長、^{ひらまつくにお}平松邦夫。

これから綴るのは、その平松新市長の勇氣ある決断の記録である。